

# エッセイ 星 永 文 夫

(俳句誌『霽雪』主宰)

米寿を迎えた御婦人に「おめでとうございます」と言ったら、佐藤愛子よろしく「何がめでたい」と返された。それで正月は大分「めでたい」を控えたが、それに代わることは見つからず、モタモタしていたら、種田山頭火の自由律句を思い出した。

お正月の鴉かあかあ

あ、一月は全くボケて、カアカアと鳴くばかりであった。

一月の禁句は何だろう。「歳時記」によれば二月は春とあるが、〈寒さ〉はまだまだ。陰暦の二月は「如月(きさらぎ)」という。その語源は「着重着」、重ねた上にもう一枚重ねなければ〈寒い〉月なのだ。乙女らは「春は名のみの風の寒さよ」と歌う(古いなあ)が、これはいささか甘すぎ

の感。二月の「寒いね」はやはり禁句。「それでどうした」と返されそうだが…。

■ 私にこんな句がある。

昭和史の厚さにどかと雪  
二月

## 二月の〈寒い〉

頭にあったのは昭和十一年、青年将校らが反乱を起こした二・二六事件。その家の澤地久枝は「昭和史の謎 二・二六事件最後の秘録」『雪はよごれていた』を書いている。その事件後、挙国一致の政策がますます強化され、日中戦争そして太平洋戦争へと突き進んで

いく。昭和十五年には〈紀元二千六百年祭〉が開催されて、国威の高揚はいちだんと強まり、当時幼児であった私も、キゲンハニセンロツピャクネトと唱って、小国民としての意気を示したものである。

これらが頭に溜まって「どかと雪二月」となったのだが、この思いは今に至るも同じ。近年、北朝鮮の核・ミサイル問題を初めとして、国内外ともきな臭い情勢になってきて、それをニューズで見る度、あの〈寒さ〉が戻って来る。二月はまことに寒い月である。

■ 伊丹三樹彦の句に、こんな句がある。

引き寄せて墓ばかり 二月の望遠鏡

『近代俳句大観』(明治書院)にこの句の鑑賞文が載っていて、それにこうある。

カット：中村賢次



「望遠鏡の視野に入ってくるのは墓ばかり(中略)墓石の一つ一つの表情が分かるほどはっきり見え、それが咄嗟に死という観念を、作者の頭によみがえらせた」句だという。昨年の震災後、墓地公園の墓石がバタバタ倒れているのを見たとき、確かに同様の感懐を持った。墓を抜けた死者たちの魂は、この荒涼たる墓地公園のどこをさまい歩いているのだろう。そして我もまたいつか、その仲間に加わって彷徨することになるのだろう。思えば、この二月は身も凍る〈寒さ〉である。

前二句に比べると、三橋鷹女の次の句の二月の〈寒さ〉は少し趣きが違う。

詩に瘦せて二月渚をゆく  
わたし

俳句革新を目指した新興俳句運動の影響を受けながらも、その外にあって独自の道を歩いた鷹女らしい句。「詩に瘦せて」とはなかなか思い通りにならぬわが道をいう。それでも寒い二月の渚を歩こうと決めた、その姿が凛として、〈寒さ〉を身の内に取り込もうとしているかに見える。二月の〈寒さ〉を楯にして挑戦する気概がそこにある。

■ 二月の〈寒さ〉もとりようで、忍耐するか挑戦するか、それぞれが自らの意欲でそこに花を咲かせることができたなら、一月の禁句〈めでたい〉も復活させていいかなあ、と思ったりして。

去年のクリスマスイヴに熊本市現代美術館に行きました。十二月から始まった「熊本城×特撮美術 天守再現プロジェクト展」を、スベイン人のご主人を連れて帰省した同級生と一緒に鑑賞して楽しみました。彼女が住むヨーロッパや、アメリカでは、日本のお城ファンで一番の人気があるのは熊本城、なのだそうです。子供頃、彼女とは同じバスで熊本城の石垣を見ながら学校に通っていました。実は、この『天守再現プロジェクト』の特撮美術三池敏夫監督も、日本で唯一の特撮研究所の代表を務める佛田洋監督（北京原人（日本アカデミー賞特殊映像技術賞）「男たちの大和」「山本五十六」仮面ライダーシリーズ他）と小中学校時代からの同級生でした。校時美術部の「ブツちゃん」と三池ちゃん、と気軽に呼んでいました。今や世界を相手に特撮技術の最高峰に立つ二人は、雲の上の人になって活躍しています。二十分の一に再現された熊本城が聳える館内は、城下町に息づく明るい熊本の人々の日常の雰囲気が漂っています。特撮セットの中

エッセイ

藤川 いずみ

（邦楽者）

に入って写真を撮ってもらうと、ただでさえ大柄な自怪獣のように見え、破壊する帰って楽しみました。壁面の雲の中にウルトラマンやセブンを発見すると、一昨年大地震があった熊本に住む一市民としては、なんだか空からも守ってくれてくれるようで心強く安心感に包まれる感じがします。この展覧会には「発見する面白さ」が散りばめられています。こうして特撮美術で再現してみると、

美術部三羽鳥

隣の部屋にある江戸時代の熊本城境界の縮小模型もよく目を凝らして見たい気持ちになります。二の丸はどこ？今の細川刑部邸はどこら辺？とか、武家屋敷の様子とか、ジーンと眺めてはその場所を指さしながら友人たちと話が弾みます。しかし、この縮小模型、どこかで見たことある？と思ったら、熊本城本丸御殿の入り口近くにある部屋に

置かれていたものではないかかと思いましたが、平成元年から毎年、熊本城で箏を弾かさせて頂いていた私は、何回度もこの横を通り、目の奥に映っているはずなのに、未だかつてしっかりと見たことがなかったことに気が付きました。そこにあるのが当たり前であった時には見えていなかった心の目が、ここでパッと開きました。映像室に入ると、特撮美術ミニチュア製作の第一人者伊原弘さんが画面の中で、パーリツ一つから全体を組み立てていく様子まで、

熊本城再現の過程を詳しく見せてくれています。私はこの映像を見て大変深く感銘を受けました。それは、自分が箏で作品に取り組むときに、楽譜（設計図）を見て、素材を選び、一つずつパーツを作り、それを土台に大きな



カット：中村賢次

構造を創っていく過程に重なるって見えたからです。三池監督は映像の中で「ゼロから造る」「現実を再構築する作業」と語っていましたが、特撮美術ではゴジラや怪獣に壊されるために作るのだから、造っては壊され、造っては壊されという事が続く中で、ひたすら地味な作業を繰り返しながら、その技術が磨かれて、特撮技術が構築されて行っただけの歴史を想像します。伊原さんは、スタッフとお城の屋根を組み合わせたお城の二こはこだわって精密に…、ここは現場合わせでゆるく」とか職人さんにはしか分からないような感覚を語られています。「磨きだけで一日かけて丁寧にして、塗りは八回かけて色むらを出してリアリティを出す！」など、伊原さんの口から出る一流のモノづくりの職人さんの言葉の数々は、私にとって沢山の教えとインスピレーションを受ける宝石のようなものでした。私は昨秋、東京でソロリサイタル（第七十二回文化庁芸術祭参加公演）を行いました。三木総作曲（箏譚詩集）春夏秋冬二十曲と三木先生が私に残して下さった遺作（新箏オーバード）を二時間十五分、全二十一曲ソロで通奏することに挑

戦しました。この挑戦は二年連続で、熊本と東京で行いましたが、誰も登ったことのない大きな山を一人で一歩一歩登って行くようなもので、何度か失敗を繰り返しながら歩み続けるしかない苦行の道は、今もまだ続いています。熊本城が再現されていく過程を見ながら、自分が作品に取り組んでいく中で、まだその域まで到達していない、やらなければならぬ作業工程が沢山あることを痛感しました。世界に認められる日本の技術は、足元の一つ一つから丁寧に愛情をこめて形作られていき、そこに信頼が寄せられて行く。その様子を垣間見て、この『天守再現プロジェクト』の深い意味を感じる事が出来ました。展覧会を見た数日後、美術部の三羽鳥だった町野君（まちの胃腸科外科院長長…写真展でグランプリ等数々受賞）からメールが届きました。「三池君は網膜剥離の緊急手術を、東京の病院で受けたそうで、幸い視力は回復する見込み。秋から医者に安静と言われていたが、今回の大役は手を抜けないので誰にも伝えられないで、勝手に打ち込んでいたらしい…。『あの展示は三池君の魂が宿っています。』」と書か